

## 後撰和歌集注釈(六)

— 卷三春下 (123~146) —

やよひ許の花のさかりに、みちまかりけるに 僧正遍昭

123 折りつればたぶさにけがるたてながら三よの仏に花たてまつる

三月の頃の花の盛りに、道を行きましたときに

折ってしまうと、手だけがれてしまう。木に立てたままで、三世の諸仏に花を奉ります。

『遍昭集』I3の詞書「二月ばかりみちをまかるとて」とある。『大和物語』一六八段、歌同じ。詠歌事情の説明なし。

「たぶさ」は『新撰字鏡』に「腕 太不佐」と、『名義抄』に「腕 ウ デ タブサ タムギ」「肘 ヒヂ カヒナ タフサ ヒチニフシ」とある。厳密には手ではないようだが、字数の関係などで「たぶさ」を用いたのであろう。

「たてながら」は、地に生えている木のままでの意。

「三世の仏」は、『法華経』の語で過去・現在・未来の諸仏。迦葉諸仏(過去仏)、釈迦牟尼仏(現在仏)、弥勒諸仏(未来仏)という。

工 藤 重 矩

(平成二年九月十日受理)

一首の意は現代語訳のとおりだが、詠歌の実際については、『新抄』に「まことには、紅葉の錦神のまにまに〔古今集旅・菅原道真、上句〕このたびはぬさもとあへず手向山」などの如く、途中なれば、折取て物せん便あしきゆゑに、立ながらなるを、手ぶさに汚るといひなし、さて常にをり取りたる花は本尊やうの仏に供する事なるを、今はたてながらといふによりて、三世の仏にと広くいはれたるなるべし」というような事情であろう。手に汚れることを真心に憂えたというのではなく、桜花の木立をそのまま諸仏の供花に見立てるところが、この歌の興。

『標注』の引く『三代実録』貞観一六年(八七四)三月二三日条の貞観寺大齋会の願文の「原野旅生之菜可施十方之僧、山林自笑之花足供三世之仏」は遍照の歌に影響しているか。遍照は嘉祥三年(八五〇)に出家しており、この齋会は「親王公卿百官畢集、京畿士女觀者填噎」という有様であったから、おそらく遍照もその場に居あわせたであろう。

『為頼集』七「折りつれば心もけがるもながら今の仏に花たてまつる」はパロディ。影響歌『万代集』釈教・僧正行意「吉野山峰の千草を

分け越えてつめる花これ三世の仏に」『新撰六帖』六・しきみ「しきみ摘む時の間もなく山寺にわきて一夏花たてまつる」『秋篠月清集』一六〇四「草木まで心あるべし法の庭花たてまつる春の山嵐」など。

## 題しらず

124 みなその色さへ深き松がえにちとせをかねてさける藤波

水底に映った色までがみどり濃い松の枝に、千年も続くにちがいないさまで咲いている藤の花よ。

水辺の松に藤の花が咲き懸かっているのを詠んだ歌。「水底の色さへ深き」は、濃い緑の松が水に映って、水の色までが松の緑と同じように濃いのを「さへ」と言った。それほどに松の緑が濃いというのである。色が濃いのを水の緑で「深し」ということは、一一一番に既述。なお例を加えれば、『貫之集』六二「藤の花色深けれやかげ見れば池の水さへ濃紫なる」同四一三「水底にかけさへ深き藤のはな花の色にや棹はさすらむ」など。とくに「ふぢ」の花の場合は、「淵」を掛詞とするので、「深し」はその縁語となる。「さく（咲く・裂く）」は「波」の縁語。

「千年をかねて」は、千年の将来にわたつての意。『古今集』大歌所歌「新しき年のはじめにかくしつ千年をかねて楽しきをつめ」に拠る語であろう。片仮名本・堀河本は「チトセヲカケテ」とある。意は「かねて」と同じであるが、その場合は、「懸け」を掛けて「藤」の縁語となる。また「千年」は「松」の縁語でもある。本集一三二一・一三七六に例あり。『芸文類聚』松に晋の傅玄の詩「世有千年松 人生詎能有」などあり、本朝の島田忠臣の『田氏家集』「鶴栖松」に「千年松与千年鶴 同類相依 樹抄尖」などがある。松と藤も定型化した結びつき。

125

やよひのしもの十日許に、三條右大臣、かねすけの朝臣の家にまかりて侍けるに、ふぢの花さけるやり水のほとりにて、かれこれおほみきたうべけるついでに 三條右大臣  
限なき名におふぢの花なればそこゝもしらぬ色のふかさか

三月の三十日の頃に、三條の右大臣定方が兼輔朝臣の家にまいりましたときに、藤の花の咲いている遣水の辺でこれかれの人々が御酒をいただきました、そのついでに  
限りなく深い「ふぢ（淵）」という名を持つ「ふぢの花」なので、底もわからないほどの色の深さだなあ。

この歌からの一連の唱和は『三条右大臣集』『兼輔集』にも収められている。ただし、貫之の歌はない。便宜上、二集の歌をここに一括して掲出しておく。なお、適宜漢字をあてた。

## 『三条右大臣集』（新編国歌大観）

やよひのつごもりに、中納言兼輔の京極の家におはして、遣水のほとりに藤の花の盛りなりければ、あるじのたまへりける  
6 限りなき名におふぢの花なればそこひもしらぬ色の深さか  
かへし

7 色深くにほへることはふぢ波の立ちもかへらず君とまれとか  
中納言、またそへてはべりける

8 あかなくに君帰りなば藤の花かけてやさらに恋ひわたるべき  
かくて管絃してあそび給ひて、夜ふけにければ、その夜とまりて、あしたによみ給へりける

9 きのふ見し花の顔とくけさ見れば寝てこそさらに色まさりけれ  
かへし 中納言兼輔

10 一夜のみ寝てし帰れば藤の花こころとけたる色みせんやは

『兼輔集』(新編国歌大観)

京極の家の藤の賀、三月一日しけるに、三條の右大臣殿  
25 限りなく名におふふぢの花なればそこひもしらず色の深さに

返事

26 色深くにほひしことはふぢ波の立ちもかへらず君とまれとぞ

またおとど、夜明けにけり

27 きのふみし花の顔とてけふ見れば寝てこそさらに色まさりけれ

とあれば、また

28 一夜のみ寝てし帰れば藤の花こころとけての色みせむやは

また

29 いたづらに明けばあやなしほととぎす鳴くを待つとて君はとどめん

なお、歌仙家集本兼輔集には「色深く」の次に、「またかへし」として「あかぬまに君帰らずは藤の花かけてやさらに恋ひわたるべき」の歌がある。「いたづらに」の歌は『兼輔集』にのみ存する。

三集とも基本的には同じと考えてよいであろうが、ただ『三条右大臣集』では「限りなき」が「あるじ」である兼輔の歌となっており、作者が逆である。次々の歌で見ると、亭主が兼輔であることは疑いない。従って、「色深く」が兼輔であれば、「限りなき」は右大臣の作でなければならぬ。『三条右大臣集』のこの詞書は誤りということになる。

『後撰集』では堀河本が「やよひの十日許に、三條右大臣の家にまかりわたりて、藤の花の下、遣水のほとりに、これかれをのこどもはむべりて、さけたぶるついでに、右大臣」とあって、兼輔が右大臣邸を訪れたことになっている。このような伝本の存在と『三条右大臣集』の詞書

とは、何か関連があるのかもしれないが、今は底本等の形に従う。

京極の家とは、兼輔の通称ともなった「堤」の家であろう。ただし、この堤邸はもと右大臣定方の所有であり、定方女と結婚した兼輔に貸し与えていたのであることは、八五番に述べた。兼輔と定方はもともと従兄弟であるうえに、兼輔は定方女を妻としていたし、後には兼輔の男清正(母未詳)も定方女を妻としたので、二人は並々ならぬ関係にあった。定方は何かにつけて兼輔を引立てた。それで、兼輔は、藤の花の盛りに宴を催し、元来定方の邸である堤第に定方を招いたのである。

「限りなき」の歌は、賓客として、定方が詠んだもので、『正義』が「亭主兼輔卿をいはひよめる也」というごとく、「藤」に藤原氏を寓して、その繁栄をことほいだ。兼輔個人というよりも、表現としては、兼輔・定方をも含んで藤原氏全体を自賛していると見るべきであろう。藤の花に藤原氏を寓する早い頃の例に、『田氏家集』下の基経の藤花宴での詩に「家香更作国香」の語がある。

修辞は一二四番と同様で、「藤」に「淵」を掛け、淵の縁で「底」もしらぬ」といい、「色の深さ」といった。歌意は『新抄』に「かぎりなき名に負ふ藤のとは、藤を淵によせて、淵という名に負ひてある藤なれば、其色もかぎりなく、底ひもしられぬ深き事かなとなり。さて下句にそこひもしらぬ云々は、あるじの御ふるまひ奥ゆかしき事どもにもあるかなといふ意をかね給ひ、そを底ひも云々といはんとて、上の句は、かぎりなき云々とはおき給へるなるべし。名に負ふとは、其名に負持つ事にて、俗言にいはいは、某ト名ニ付キテアル、其ノ名ノ通りノといふ意なり。淵・底ひなどはやり水のよせなり。末句の文字はかなの意なり」とあるので尽きている。但し、下句に亭主の振舞の奥ゆかしさを含めていえるのは、いかがであろう。この句、表面は花の色の濃いことをいい、そ

れに藤原氏の栄えを寓しているとみれば、亭主のことに限らなくてよいであろう。

「限りなき」の係りどころが、ややあいまいである。『新抄』のごとく「色の深さ」に係るとみれば、文法的にも意味的にも無理がないが、被修飾句が離れすぎる。やはり「名」に係るとみるのがよいであろう。「名に負ふちの花」は、表面的には「淵」という名を持つているふちの花」の意だから、補つて訳せば、限りなく深い淵という名を云々となるうか。このような無理は、実は「藤の花」の寓意の方に力点を置いたためだと思われる。「限りなく栄える藤原氏の、そのふち」という名を持つ藤の花なので」というのが本意であるから、「限りなき藤原氏」ということを言いたくて、このような表現となつたのであろう。『古今集』雑上・藤原良房の「限りなき君がためにと折る花は時しもわかぬものにぞありける」も、同様に切り詰められた表現である。

「そこゐ」は『万葉集』に「曾許比」とあり、歴史仮名遣いは「そこひ」であるが、写本には「ひ」「ゐ」の両様あり、「そこゐ」と書く書写者の意識は、「雲ゐ」「家ゐ」などと同じ語構成で、「底居」のつもりであるかもしれない。「住ひ」を「住ゐ」と表記する写本も多いが、これも同じことで、単に仮名遣の違ひということではないであろう。

#### 兼輔朝臣

126 色深くにほひし事は藤浪のたちもかへらで君とまれとか

色濃く藤の花が咲きましたのは、あなたはお帰りにならないで、お泊りください、という意味でしょうか。

『三条右大臣集』『兼輔集』の本文は一二六に掲げた。

定方の歌の「底ひもしらぬ色の深さか」をうけて、「色深くにほひし」とは」と詠み出した。定方は藤花の色の深さに藤原氏の栄えを寓したが、兼輔はそれを理解したうえで、目前に居る岳父定方個人を接待すべく、寓意の方向を転じた。

「ふちなみの」を枕詞的に用いて「たちもかへらで」という（立ち返るは浪の縁語）。同じ例、『古今集』春下・躬恒「わが宿にさける藤波たちかへり過ぎがてにのみ人の見るらむ」など。「とまる」は宿ることで、必ずしも常には「水」と縁があるわけではないが、いまは池辺の遊宴でもあり、表現も「深し」「ふち（藤・淵）浪」「立ち返る」と水の縁語でまとめているから、「泊まる」には、舟が泊まる趣きを添えているとみてよい。宇多法皇が中務卿慶親王の家の池で舟遊びして、帰ろうとした時に、伊勢が詠んだ歌「水の上に浮かべる舟の君ならばこそ泊りといはましものを」（古今集雑上）も同じ趣き。

花を以て人の帰るのを留めようとする例に、『古今集』別・幽仙法師「ことならば君とまるべくにほはなむ帰すは花の憂きにやはあらぬ」などある。兼輔の歌には、この幽仙の歌のおもかげがある。

歌の構文としては、「：は：と」の形は、目上の者を婉曲に勧誘するときの類型表現の一つである。『大和物語』一二二段、近江守が、宇多法皇の石山御幸の帰途を接待すべく、打出の浜に大伴黒主を侍らせて献じた歌、「ささら浪まなくも岸を洗ふめり渚清くは君とまれとか」もおなじ構文、おなじ意図。「AはBとか」の構文は、Aという現象があるのはBという意味でしょうかと、客観的に分析し疑問を呈する体裁を装って、目上の者を婉曲に勧誘するのである。「と」は格助詞、「か」は疑問の係助詞。

## 貫之

127 さほさせどふかきもしらぬふちなれば色をば人もしらじと思ふ

棹を差しても深さもわからないほど深い淵の色のような藤の花なので、そのほんとうの深い色を、人は知らないであろうと思います。

この歌は『三条右大臣集』『兼輔集』になく、『貫之集』にもない。

「藤」と「淵」との掛詞、一二五・一二六とおなじ。上句、『土佐日記』二七二条の「棹差せど底ひもしらぬわたつみの深き心を君に見るかな」また『貫之集』四〇五「水底にかけさへ深き藤の花の色にや棹はさすらむ」などと類似の表現(標注に指摘あり)。

萩谷朴氏は、貫之の『土佐日記』の歌は李白の「贈汪倫」の「桃花潭水深千尺 不及汪倫送我情」を踏まえ、この一二七もその詩を踏まえるという。『土佐日記』の場合は状況としてふさわしいが、この場合は必ずしもそうでなく、「棹差せど」云々も直接関連する語はない。

表面的意味は現代語訳のとおりだが、さて何を言おうとしている歌かとなると、よくわからないところがある。『新抄』は、一度は賓客右大臣の側からの詠と考えて、兼輔の「たちも帰らで」に応え「かくかりそめに来て、すべてくいとねんごろにておくゆかしき事どもなれば、実に立ちもかへらで長く居よと思ひ給ふにや、又は勉めてあへしらひ給ふにや、其心中をば誰もしり侍らじと思はるとなるべし」と詠んだと解した。しかし、兼輔の心が本心が社交辞令か誰も知るまい、というのではいかにも変だと思ったのであろう。『新抄』は、貫之が兼輔の邸に出入していたことを以て、貫之の立場を兼輔の側に改め、「げに底ひもしらぬとたまふはさる事にて、主(兼輔)の心はたどりもしらぬ深き心なれば、ねんごろに思はるゝ程をば誰にてもしり給はじと思ふといふにても

あるべし」とも解している。

窪田空穂『続紀貫之家集』(紅玉堂書店 昭2)は、下句を「藤の花の色」の深さは君(定方)は御存知あるまい」と訳し、「色」には「兼輔の心を含ませてある」とする。貫之の立場を「取持として、一方は客の定方に喜びを加へようとし、同時に一方では、主人の兼輔の云はんとするところを云つてゐるのである」と説明する。『新抄』の第二の解と同じである。最近の『新古典大系』でも「一二四を承けて『深さも知らぬ淵』と兼輔を讀え、淵があまりに深いので藤の花の色の深さもわかつてもらえないだろうと言つて定方をとどめようとする兼輔に調子を合わせている貫之の姿勢がよくわかる」と、やはり同趣である。

本集のこの部分は一二五・一二六・一二七で一纏り、次の三首でまた一纏りという構成である。一二五と一二六とは措辞においてもよく対応した唱和歌となっているが、一二七は前二首に密接には対応しない。上句は一二五「そこひもしらぬ色の深さ」に対応する如くであるが、下句「人も知らじと思ふ」は、一二五で定方が「色の深さか」と深き色を賛嘆し、兼輔はそれを「色深くにほひしこと」とうけて、色の深さを既定の事実としているのに、貫之が「色をば人も知らじと思ふ」と言うのは、右大臣定方と兼輔の唱和を否定した形となり、この貫之の歌が二首に対応する歌として詠まれたものならば、非礼な歌である。上記の諸解のように考えて、一応解釈できないことはないが、三首を一括して解そうとすると、おさまりが悪いことも確かであろう。

貫之の歌は、定方・兼輔と同じ唱和歌として詠まれたものではないと考えるべきではなからうか。『貫之集』にも採られていないので、不審が残るが、いま貫之の歌をこの宴席で詠まれたものとしても、一二五・一二六・一二七の順でなく、一二七が最初なのではないか。一二五・一二

六はその内容からして、そろそろ宴も終わろうとする頃である。それに對し、貫之のは宴たけなわの頃に、藤の花の色の濃さを讃えて詠まれたものではなからうか。『後撰集』は三首を一組として配列しようとしたために、身分の低い貫之が最後に置かれることになったのであろう。『後撰集』は貫之を兼輔一族とセットで扱う傾向がある。『三条右大臣集』『兼輔集』で貫之の歌を採録しないのは、定方・兼輔にとっては、貫之はその程度の存在でしかないということでもあろうが、もともと定方と兼輔のは唱和歌として一組であったが、貫之のはそれとは無関係に詠まれた、独立した歌であったからでもあろうと思う。

ことふえなどしてあそび、物がたりなどし侍けるほどに

夜ふけにければ、まかりとまりて 三條右大臣

128 昨日見し花のかほとてけさ見ればねてこそさらに色まさりけれ

琴笛などでもって遊宴し、いろいろな話などしていますうちに  
夜が更けてしまいましたので、そのまま留りまして

昨日見た花の顔ということで、今朝また見てみると、一夜寝ていっ  
そう容色がまさって見えることです。

『九条右大臣集(師輔集)』七九に「兼輔朝臣の家にてあそびしものか  
たりなどしてかへるとて」の詞書で採られているが、三條と九条とを誤つ  
ての採録であらう。

『新抄』の説明がよい。「藤花を女の容儀などの如くとりなして、一夜  
寝て馴つれば、又今朝はことさらに色のまさりて見ゆる事よとなり。紫  
色はまことに朝はまさりて見ゆるものにもあり。又女などの相馴ては容  
儀の見まさりするやうに思はるゝも人情の常なり。猶、人の姿の朝まさ

るよしは夕顔巻に、源氏君の御事を、日さし出るほどに出給ふあさけの  
御すがたはげに人のめで聞えんもことわりなる御さまなり、なども見え  
たり。花のかほは、興風集(二〇)「うすくこき色はまがへど〔わけども〕  
花といへばひとつ顔にも見えわたるかな 若紫巻奥山の松のとほそをま  
れにあけてまだ見ぬ花の顔を見る哉 など、猶あり。」

「花の顔」は本集七・一七「諸共にをるともなしにうちとけて見えにけ  
るかな朝顔のはな」などもある。漢詩で花のことを比喩的に「花顔」と  
いう。『田氏家集』「掃庭花自落」の詩に「朝来尋逐見花顔」など。

「けさみれば」を第三句に置く構文の歌も多く、本集三〇九・五七五  
など。「昨日…今朝」の類例、『定頼集』四四「昨日みし色も変りて朝毎  
に面がわりする庭の菊かな」は本歌の影響があろう。

兼輔朝臣

129 ひと夜のみねてしかへらば藤の花心とけたる色見せんやは

一夜だけ寝て帰るならば、どうして藤の花が心のうちとけた様子を  
見せるでしょうか。本当に心許した色をご覧になるためには、もっ  
といつまでもお泊りください。

定方が藤の花を女の顔にとりなして詠じたので、兼輔も藤の花(女)  
の立場から、一夜だけの宿りを浮気な男のかりそめ事とりなして、そ  
のような男には、女は気を許した気色は見せないものだから、もう一晚  
お泊りください、今夜はもつと…と引き留めた。挨拶でもあろう。

『古今集』恋一・詠人しらず「春立てば消る氷の残りなく君が心は我  
にとけなむ」 本集恋一・五七五「泣きたむる袂凍れる今朝みれば心と  
けても君を思はず」 『大和物語』九〇段(修理の君)「高くともなにに

かはせむ呉竹の一夜二夜のあだのふしをば」

## 貫之

130 あさぼらけしたゆく水はあさけれど深くぞ花の色は見えける

夜明け方に、藤の花の下を流れて行く水は浅いけれど、花の色は深  
いと見えることです。

『古今六帖』第六花・貫之、歌おなじ。家集になし。

「あさぼらけ」は「あさぼらけ有明の月とみるまでに吉野の山に降れ  
る白雪」(古今集冬・是則)が早い時期の用例。『名義抄』に「凌晨」「曙」  
をアサボラケと訓んでいる。『邦訳日葡辞書』には「Asaborage 詩歌語、  
夜が明けたころ」とある。

「下行く水」は「山高み下行く水の下にのみ」(古今集恋一)などのご  
とく、表面に出ないことの喩えに用いられることが多いが、ここは藤の  
花の下を流れる水。同じ用法は『貫之集』一七九「菊のはな下行く水に  
かげみればさらになみなく老いにけるかな」など。『詞花集』春・源師賢  
「桜咲く木の下水は浅けれど散りしく花の淵となりけれ」は影響を受け  
ているかもしれない。下句、花は言うまでもなく藤の花なので、語とし  
ては表面に出ていないが、やはり「淵」の面影を添えている。

第三句の「浅けれど」と第四句の「深く見え」という矛盾対立がこの  
歌の眼目であるが、「藤・淵」の掛詞、水の縁語による構成の連続のあと  
では、平凡な類型と感ずるのもやむをえない。しかしまた、当座の詠と  
してはそのような類型的表現がむしろ喜ばれたのもあろう。

「…ぞ…色は見えける」の類型、「吾妹子がひもゆふくれの菊なればあ  
かぞ花の色は見えける」(続後撰集秋下・坂上是則)「浮き沈み淵瀬流

るもみぢばは深く浅くぞ色も見えける」(伊勢集一四六)など。

さて、この歌の表面的意味は明らかだが、一二八・一二九と一続きの  
歌として見る場合は、なかなか難しい歌である。『新抄』は一二七の場合  
と同じく、兼輔の側からの取持の歌と見て、「げにあるじのたまふ如く、  
一夜ばかり宿りて帰り給ふは、深き御心にあらねど、主人のもてなしは  
浅からぬ御心しらひと見ゆるなり」という意と聞ゆ、下行水は、歌の表に  
ては、やり水のことにて、裏の意にては、右大臣のかへりゆき給ふ心を  
いふなり」と解する。もし、寓意のある歌とみるのであれば、「花の色」  
は「主人のもてなし」ではなく、前歌とおなじく、女の様子と解すべき  
であろう。藤の花(女)が右大臣を深く慕っているように見えると、定  
方をもてはやしたのである。なお、『新古典大系』は「御主人(兼輔)」の  
お心はまことに深い」と定方の立場での代弁とする。

三首を一組とみれば、一応は右のように解しうるであろうが、前の三  
首と同様、定方と兼輔との唱和の緊密さに比べれば、貫之の歌だけが、  
内容的にも措辞的にも浮いているとの印象は否めない。措辞としては、  
むしろ一二五などに近い発想である。この貫之の歌も、一二八・一二九  
に対応するものとして詠まれた歌とは考えないほうがよい。別に詠まれ  
たものを、『後撰集』撰者が貫之の歌を一組として配列しようとしたため  
に起った現象であろう。

さらにいえば、貫之はもともと同席しなかったのだが、後に定方・兼  
輔の唱和を聞いて追和したというような事情を想定することも不可能で  
はない。大井川御幸に召されなかった壬生忠岑がのちに同題で詠歌した  
し(山口博『王朝歌壇の研究』宇多醍醐朱雀朝篇「四八六頁以下」、栗田  
左府の尚歯会に参列できなかった菅原輔正は、それを嘆いて参列した資  
忠に詩を送った(栗田左府尚歯会詩)例もある。

## 題しらず

よみ人も

## 131 鶯の絲によるてふ玉柳ふきなみだりそ春の山風

あの古歌に、鶯が糸に縋るといふ柳の吹き乱すな、春の山風よ。

『古今集』神遊歌また催馬楽・青柳の「青柳をかた糸に縋りてうぐひすの縫ふてふ笠は梅の花笠」に拠る。「玉柳」の語は、柳の美称だが、『新抄』の指摘するごとく、催馬楽・高砂の「高砂のさいさこの尾の上に立てる白玉玉柳」云々の「玉柳」に拠るであろう。なお、「玉柳」について「後撰集抄」（彰考館蔵、国文学研究資料館の写真による）は、『初学記』の「弱柳其葉似小玉」また島田忠臣（和漢朗詠集）の「春嬌黃珠纈柳風」を引く。

「春の山風」は『古今集』春下・遍昭「花の香は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風」を意識した語であろう。類似の言い回しには「恋しくは見てもしのばむもみじ葉を吹きな散らしそ山おろしの風」（古今集秋下）がある。

『詞花集』春中・平兼盛「佐保姫の糸めかくる青柳を吹きな乱りそ春の山風」（天徳四年内裏歌合、家集では「春の初風」）の下旬はそのまま借用である（標注）。

『万代集』春上・基俊「春風は吹きな乱りそわざもこがかづらにすてふ青柳の糸」は本歌取。『金葉集』秋・長実「ま葛はふあだの大野の白露を吹きな乱りそ秋の初風」『新葉集』冬・詠人しらず「はしたかのかりばの鳥の落ち草を吹きな乱りそ野辺の夕風」は、『後撰集』からか兼盛からかは判然としないが、下旬に影響が見られる。

さくらの花のちるを見て

みつね

## 132 いつのまにちりはてぬ覧桜花おもかげにのみ色をみせつゝ

桜の花が散るのを見て

桜の花はいつたいつの間に散ってしまったのだろう。花の色を今も面影にだけは見せていながら。

『躬恒集』三七八第五句「いまはみえつつ」。『古今六帖』第六桜では第二句「ちりはてにけん」（堀河本・承保三年奥書本におなじ）。また『続後撰集』末精撰本系の春下に、題知らず、作者躬恒で採られているが、精撰本では除かれている。

散り果ててしまった桜の木を見るたびに（「つつ」とあるので、繰り返し）、花盛りだった時の有様が幻影となって見えるのに、もはや現実の花は散り果てている、一体いつのまにかくもあつてなく散ってしまったのだらうと、いぶかる気持ちである。

『新抄』の指摘する『拾遺集』雑春・躬恒「咲かざらむものとはなしに桜花面影にのみまだき見ゆらむ」は、咲く前と散った後との違いはあるが、同じ作者による同じ発想のうた。桜と紅葉の違いでは、本集三九一・貫之「たまかづらかづらき山のもみぢ葉は面影にのみ見えわたるかな」もある。『新抄』に引く『続古今集』春下・為家「よしさらば散るまでは見じ山桜花の盛りを面影にして」は本歌取。

「いつのまにらむ（けむ）」の言い回し、『古今集』夏「いつのまに五月きぬらむ」などのほか、本集一五・七二九・一二三六など、類型表現の一つである。

あつみのみこの花見侍ける所にて 源仲宣朝臣

## 133 ちることのうきもわすれてあはれてふ事をさくらにやどしつる哉



敦実親王が花を見ました所で

花が散ることの憂さも忘れて、今日は「あはれ(すばらしい)」という言葉を桜の花にかけてしまったことだ。

この歌は『貫之集』六三八「散るときは憂しといへども忘れつつ花に心のなほとまるかな」に拠る。「あはれてふことを」云々の句、『古今集』夏・紀利貞「あはれてふことをあまたにやらじとや春に遅れてひとり咲くらむ」に拠る句。

「言をやどす」という言い方、未だ用例を見いだしてはいない。意は契沖(標注)がいう「桜にやどすとは花の上に置く事なり」であろう。葉に露が宿ると同じイメージなのであろう。

敦実親王は宇多皇子。康保四年(九六七)薨、七五歳。源仲宣は光孝源氏。一世源氏源貞恒の子。敦実親王とは従兄弟である。その関係で親王に陪従したのであろう。仲宣の生歿は未詳。勅物には「延長八右少将承平六四位 右兵衛督」とある。承平元年九月左少将在任、天慶三年一〇月一日左京大夫在任(吏部王記)。

さくらのちるを見て

よみ人しらず

134 桜色にきたる衣のふかければすぐる春日もおしけくもなし

桜の散るのを見て

着ている衣が桜色に染まって、その色が濃いので、衣に春が残っている気がして、過ぎて行く春も惜しいこともない。

歌意は『新抄』に「落花を惜しまぬにはあらねど、惜しみてかひなければ、せめて我衣の色に思ひ慰むる心也」ということである。「桜色に着たる衣の深ければ」は「着たる衣の桜色に深ければ」の意。この歌は

諸抄が指摘するとおり、『古今集』春上・紀有朋「桜色に衣は深く染めて着む花の散りなむのちの形見に」に拠る。

「桜色」は襲の色目(↓七七)・染色ともにあり、男も狩衣に桜・権桜・桜萌黄などの色目があるが、この歌では(古今集でも)実際に桜色に染色したのではなく、十分に桜の花を見めて、それで着ている衣があたかも咲き匂う桜の花の色に染まったかのごとくであるのを、「桜色に衣は深し」と表現したのであろう。『新抄』は、実際に桜色の衣を着ていると解しているようだが、そう考えることも可能であろう。

『古今集』紀有朋あるいは『後撰集』のこの歌の影響を受けている歌には、『拾遺集』夏・詠人しらず「桜色に我が身は深くなりぬらむ心にしめて花を惜しめば」『後拾遺集』夏・和泉式部「桜色に染めし衣を脱ぎかへて山ほととぎす今日よりぞ待つ」など。

やよひにうるふ月ある年、つかさめしのころ、申文に

そへて左大臣の家につかはしける

貫之

135 あまりさへありてゆくべき年だにも春にかならずあふよしも哉

三月に閏月があつた年、春の司召の頃、申文に添えて、左大臣実頼の家に送つたうた

せめて春に余分の月までがあつてゆつくり過ぎゆくはずの年にでも、我が身が春に遇うすがあつたらなあ。

『貫之集』九〇三詞書「三月ふたつあるとし、左大臣さねよりの君にたてまつる」。『古今六帖』第一うるふ月・貫之、初句「うるひさへ」。

『古来風体抄』にもあり。

三月が閏月である年は、貫之の頃では、延喜四年(九〇四)と天慶五

年(九四二)である(三正総覧)。実頼に奉ったものだから、天慶五年のこととなる。そのころ貫之の官は天慶三年三月玄蕃頭、六年正月従五位上、八年三月木工権頭であるから、天慶五年の愁訴の願いはかなえられなかったであろう。申文は官職に就きたい旨の申請書で、漢文で書式に従って書かれるが、その申文を左大臣家に遣わして周旋を依頼するときに、左大臣(当時は大納言)実頼への嘆願として詠まれたのがこの歌。申文は実頼を介して式部省へ提出されるが、歌は実頼個人へあてたもの。そのような庇護者として実頼を頼ったものである。

歌意は、常の年の春は自分のようなものにまでは恩光が及ばないが、今年は閏月があつて、春光も余分があるのだから、せめてこのような年になりと恩光にあう手立てがほしい。すなわち、大納言実頼の「ひき」がほしいと訴え。

閏月を「あまり」ということ、季吟『抄』に「左伝に閏月者附月之余日、史記天官書に黄帝正閏余、後漢書張純伝に閏者歲之余、かやうの心にて、あまりありてとよみて閏の心をいへる也」とある。『標注』は閏月は「うるふつき」でなく「うるひつき」が正しいという。確かに『古今六帖』にはそうあり、雲州本も一二句「うるひつきありてきこゆる」とある。しかし、『標注』も認める如く、「うるふ」の例も多い。

官位に恵まれることを「春にあふ」ということ、本集一・一九番に既述。また「花が咲く」ということ、四六番参照。

返し

左大臣

136 つねよりもどけかるべき春なればひかりに人のあはざらめやは

常の年よりもどかにちがいない今年の春だから、人が春の光にあ

わないということは、ないだろうよ。

『実頼集』『貫之集』になし。

歌意、表面的には疑問はない。貫之の愁訴に対する返事としては、一見すると、貫之の依頼を承知して、大丈夫と約束したかのように聞えるが、必ずしもそうではない。左大臣は貫之の歌をわざと表面的にのみ、官職の愁訴を含みぬ自然のこととして理解した体を装って、返歌も、自然の理として詠んだのであろう。もとより左大臣の歌は、期待の心で読めば、大丈夫と約束してくれたようにも見える。そう読まれることを左大臣も否定はしないであろうが、言葉自体は何も約束していない。読む人の心次第で、儀礼的にも好意的にも感じられる返歌。むしろ、このような微妙な返事の仕方が、愁訴を受けたときの返歌の類型である。

上句、『躬恒集』I二四六(拾遺集春)の「三月ふたつある年 常よりもどけかりつる春なれど今日のくるるは惜しくぞありける」に似ている。「のどけかるべき」は『古今集』春下・紀友則「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」に拠る。「あはざらめやは」を末句に置く例、『古今集』五二・七〇四、本集一三七〇。

つねにまうでしかよひける所にさはる事侍てひさしく

まできあはずして年かへりにけり、あくるはる、やよ

ひのつごもりにつかはしける 藤原雅正

137 君こずて年はくれにき立かへり春さへけふに成にける哉

(貫之は)いつも参上して来ていました所に、都合の悪い事がありまして、久しいこと参上して来て逢うこともせず年が改まってしまった、その翌年の春、三月の晦日に送ったうた

あなたが来ないままで年は暮れてしまった。年が改まって、その春もまた、春の終りの今日の晦日になってしまったことだ。

『貫之集』八六二詞書「世間なげきてありきもせずしてある間に、三月つごもりの日、ふぢはらのまさただのあそんのもとより」とあって、「君こずて」と本集一三八「ともにこそ」の歌がならび、次に「とはべる返し」として本集一三九・一四〇の歌が並ぶ。『雅正集』になし。

詞書の視点が一貫していない。このまま読めば「さはる事侍りて久しく詣で来逢はず」の主体は雅正としか解せないが、歌詞に「君こずて」とあるから、来なかったのは一三九の貫之である。一三七の詞書は、返歌の作者である貫之の立場から「常に詣で来通ひける所に」と書き始めたが、「あくる春」からは雅正の視点に換って、「遣はしける」と結んだ。「つかはず」は此方から彼方へ送る意(↓五一)だから、最後は雅正の立場である。宣長「つかね緒」は「紀貫之さはる事侍て」云々と修正しているのは、同じ読解。

しかし、『後撰集』にはこの類の視点の乱れは少なくないし、また乱れていても、作者、歌詞、返歌と見て行けば、誤解の余地はないから、『後撰集』の編述者は、そのようなものとして詞書を記したと考えてよからう。読者は当然補うべき言葉を補って読むべきなのである。

「つごもり」は、月末の頃とも、晦日とも解しうるが、歌詞からすれば晦日である。二荒山本・承保三年本・雲州本などは「やよひつごもりの日」とあって、晦日と直ちにわかる。詞書としては(詞書が歌意を限定するのであって、逆ではないから)理解に便である。

「まで(詣で)」きかよふ所」とは何処であろうか。ふと読むと雅正邸かと思うのだが、下文に「まできあはず」ともある。「詣で来逢ふ」の語は『源氏物語』行幸巻、三條の宮で源氏と太政大臣とが和解する場面

も「かく参りきあひて」とあり、宿木巻に、薫が宇治の尼君の許に立ち寄ったおり、たまたま長谷参詣の帰りの浮舟の一行がやはり尼君の許に立ち寄ったが、その時の薫の言葉に「折しもうれしくまうできあひたるを」ともある。また「きあふ」の例は『源氏物語』に三例、帚木巻の木枯しの女の条「内裏よりまかではべるに、ある上人きあひて、この車にあひ乗りて侍れば」、同巻の空蟬の条「かき抱きて障子のもとに出で給ふにぞ、もとめつる中将だつ人きあひたる」、浮舟巻の薫の使いと匂宮の使いとが来合せる条「雨降りし日きあひたりし御使ひども、今日も来たりける」とある。いづれも相手がたんに自分の許に来るというのではなく、自分も出かけて、そこで行き合せるという用法である。他の作品でも、『金葉集』雑上五六二の詞書に「男のなかりける程、異人を局に入れたるに、もとの男まうできあひたりければ」とあるのは、旧の愛人と新しい愛人とが来合せたことをいう。

右のような用い方からすると、貫之が雅正の邸を訪れなかったと言っているのではなく、「常に詣で来通ひける所」は貫之が常に行き通っていた所で、そこに雅正もまた行き通っていたのであろう。其処で逢うことを「詣で来逢ふ」と言ったと読むべきかと思う。場所は、役所(内裏のどこか)であろう。雅正の官歴の詳細は不明で、貫之と官職が重なることがあったかどうかはわからない。季吟「抄」が「常にまうできかよひける所」に注して「雅正と貫之と参会せし所也」とするのは、簡潔に右の結論のみを注したものであろう。

「君こずて」の「ずて」は『万葉集』に多くの例が存するが、『古今集』は一例、本集は他に二例があるのみ。平安朝に入ってからあまり好まれなかった語法である。「立ちかへり」は年が立ちかえるの意に、貫之が家に帰って以来の意をも掛けているであらう。仮に掛けていなくても、

「来ず」と「立ち帰る」と響き合せていよう。末句に「なりにけるかな」と置く例は甚だ多く、類型構文の一つである。

138 ともにそこ花をも見めとまつ人のこぬ物ゆへにおしき春かな

一緒に花を見ようと思って待っている人が来ないので、このまま過ぎて行くのが惜しいと思うこの春だ。

『貫之集』八六三、第二句「花をも見んと」。『古今六帖』第一てるひ、第二句「花をも見んと」第四句「こぬ物からに」。

三四句は『古今集』春上「待つ人もこぬものゆゑにうぐひすの鳴きつる花を折りてけるかな」による措辞（標注・新抄）。「惜しき春かな」を歌末に置く歌、本集八四・一四六番。

一緒に花を見たいと思っていたのにでなくて残念だ、と言っているのだが、言葉どおりに、今待っているということでもない。そういう気持ちはあるとしても、特に期待しているわけではなく、三月尽という機会をとらえての、和歌による挨拶であろう。

返し

つらゆき

139 きみにだにとはれでふれば藤の花たそがれ時もしらずぞ有ける

あなたにさえも声を掛けられないで過ごしてきましたので、藤の花の咲く暮春の、その夕暮時になったことも気付かないでいました。

『貫之集』八六四「君にだにゆかでへぬればふぢ衣たれかうときもしらずぞ有ける」。第二句、貞応本および底本の行成本朱書入れも「ゆかでへぬれば」とある。

「君にだに」の「だに」は最低限の希望を現す。せめてあなたには声を掛けてほしいと思っていたが、そのあなたにさえも意。雅正をあてにしているとの、それとない挨拶。「とふ」は、訪問するでも、声を掛ける（文を送る）でも、どちらにも解しうるが、一三七の「さはる事侍りて」からは、相手の訪問を待つというのは過度の期待であろう。ただし、甘えて見せたということも考えられ、貫之としては、どちらに解されてもよいというつもりを使い方であろう。

「藤の花」と「たそがれ時」の結びつきは、『抄』『標注』等が指摘するとおり、『白氏文集』卷二三「三月三十日題慈恩寺」の「惆悵春帰留不得 紫藤花下漸黄昏」による。三月尽と藤の結びつきも、この詩や同じ白氏の「悵望慈恩三月尽 紫藤花落鳥関々」（和漢朗詠集・藤、白氏文集卷一六では「紫桐花落」）による。和歌では『古今集』春下・在原業平「濡れつつぞしひて折りつる藤の花春はいくかもあらじと思へば」（詞書、三月つごもりの日雨の降りけるに藤の花を折りて人につかはしける）など。春の果てのたそがれ時、『古今六帖』第一春の果て・貫之「行く春のたそがれ時になりぬればうぐひすの音も暮れぬべらなり」など。春の終りのそのまた終りの時である（↓一四一）。「しらずぞありける」は、そのたそがれ時にさえも気付かなかったということに、雅正の歌を得て、初めて気が付いたという気持。

この歌は一三七に答えた歌。意は、心が鬱々として楽しまないのです、春の花の咲き散りも、春の終るのも気づかないほどで、ご訪問申すのはもとより、文のご挨拶も欠礼していますとの、ことわりの歌。それを、言葉のうえで、「君にだに問はれでふれば」と相手が悪いように言い、甘えなかったところが貫之の技巧であり、また贈答歌の常でもある。

さて、『新抄』は、『貫之集』に「君にだにゆかでへぬれば藤衣」とあ

るところから、喪中のことかと言ひ、更には「とはれでふれば」の場合は、雅正の方にも訪いがたき筋ありて、心ならずも訪れないようにも見え、もしかして一三七の詞書に「さはる事」とあつて、はっきりとその理由を書かないのは「公に對ひ奉りて畏(かしこまり)にても有けんかし」と推測している。畏りの説はいかがかと思うが、家集の「藤衣」が原形であれば、喪中の可能性は高い。しかし、三月尽是藤花とあつてしかるべきだから、「藤衣」が原形と確定されない限りは、家集の形に従うのは穩当でない。

140 やへむぐら心の内にふかければ花見にゆかんいでたちもせず

荒れはてた庭に繁つて門をとぎすあの八重むぐらが、庭ならぬ心の中に深く繁つているので、花を見に行くというような外出もしないでいます。

『貫之集』八六五、歌おなじ。『古今六帖』第六むぐら・貫之、第三句「しげければ」。

贈答歌としては、一三八番に対応して詠まれたもの。

「やへむぐら」は、葎の繁きという歌語。葎は蔓性の雑草の一種。『万葉集』には「八重六倉覆庭」(二八二四)「八重六倉覆小屋」(二八二五)の二例あり、『古今集』雑下・詠人しらず「いまさらに問ふべき人も思ほえず八重むぐらして門させりてへ」により、八重むぐらの繁る家は人の訪れない家のイメージ。人が訪れて来ないから、荒れてむぐらが繁るのである。八重むぐらが心の中に深いというのは、心の鬱屈が深いということだが、その鬱屈のせいで世間との交わりも断っている、外出もしない、そういう言い方で無沙汰を弁解した。本集一〇一四「飛鳥川心の

中に流るれば」は類似の発想。

「いでたち」は、出立つとも、その準備とも解し得るが、ここは前者に解した。「いでたつ」の語は、立身出世の意がある。『源順集』二七一(下総の守藤原のするたか下るに、中納言の家に餞たまふによめるうた)「君ははや人みなみにいでたちていづみに沈む我にあふなよ」は、任国に出発するの意に、人並みに出世したの意を掛けている。『源氏物語』にも立身出世の意の例が幾つかある。この歌でも「花を見に行くような楽しみを持つことのできるような立身出世もしない」の意を掛けているか。であれば、その不満を暗に訴えていることになる。

一三七で述べた、「詣できかよひける所」は出仕先ではないか、という事との関連で考えると、貫之は雅正と出仕場所を同じくしていたが、何かの都合で貫之は任を解かれた(正式の官でなく臨時的なものであつてもよい)、そこで貫之は散位のまま自邸にこもり、翌春の司召にも漏れ、鬱々として過ごすうちに三月晦日となつた、というような事情ではなからうか。ただ「さはる事ありて」が、官職の不満による籠居という感じではない点、右の推察には不都合である。

なお、雅正の父親は兼輔である。貫之は兼輔を頼りとするところがあつたから(↓一二七)、二人の交渉は兼輔を介して、早くからあつたものと思われる。

題しらず

よみ人も

141 おしめども春の限のけふの又ゆふぐれにさへなりにけるかな

ゆく春を惜しんでも、春は留まることなく、春の最後の日である今日の、そのうえまた夕暮にまでもなつてしまったことだ。

『伊勢物語』九一段「むかし、月日のゆくさへ嘆く男、三月つごもりがたに」歌第三句「けふのひの」。『新撰朗詠集』春・三月尽、歌同じ。

「をしめども」云々は、『古今集』春下・在原元方「惜しめども留まらなくに春霞かへる道にし立ちぬと思へば」「貫之集」二二三（春の暮れ）「いつとなく桜咲けとか惜しめども留まらで春の空にゆくらむ」などと同じ発想。もとは『白氏文集』の「惆悵春帰留不得」（和漢朗詠集・三月尽）や、『白氏文集』の句による大江千里の「嘆きつつ過ぎ行く春を惜しめどもあまつ空からふりすていぬ」（句題和歌では春帰を春光とする）などにあるであろう。「なりにけるかな」を末句に置く型の歌は甚だ多い（↓一三七）。

『後拾遺集』秋下・源賢法師「秋はただ今日ばかりとぞながむれば夕暮にさへなりにけるかな」「万代集」春下・藤原清忠「咲きしより花のにほひのあかずしてやよひの今日になりけるかな」同・国信（堀河院御時百首）「あさましや日数ゆくとも思ほえて春の今宵になりけるかな」「長秋詠藻」一二二「世の中をなげく涙はつきもせて春は限になりけるかな」「千載集」春下・式子内親王「ながむれば思ひやるべき方ぞなき春の限の夕暮の空」

## みつね

142 ゆくさをしめし春のあすよりはきにし方にもなりぬべき哉

前途を惜しんでいた春が、明日からは、過去のものとなってしまうに違いないことだ。

『躬恒集』I三三八第三句「けふよりは」第五句「なりにけるかな」春を擬人化し、時間という道を行く旅人のごとくにとりなした。「行く

さき」は「遙々と雲をさしてこぐ舟のゆくさき遠き心地こそすれ」（伊勢集七二）などの如く、これから先の道程の意（↓一四三）。上句は、春がしだいに通り過ぎて行くのを惜しむのを、前途（春の残りの道のり）がだんだんに少なくなるのを惜しむと表現した。

「きにしかた」は上句との関連では、春が通って来た方向の意だが、「きしかた」と同意であるから、時間的に、過去の意に解してよいであろう。今日までは春の通って行く前途を惜しんでいたのに、明日からは季節という道は春の通って来たあととしてのみあることになるとの意。「行く先」と「来にし方」との対語構成がこの歌の眼目。

季節を擬人化し、旅人の如くに言う例は、『古今集』春下・元方「惜しめども留まらなくに春霞帰る道にし立ちぬと思へば」同秋下・躬恒「道知らばたづねもゆかむもみぢ葉をぬさと手向けて秋はいにけり」など（↓一四一）。

『新抄』は「春の暮て行くを惜しき」と思ひて居るうちに、春は既に暮はてたれば、明日よりは旧来へ戻りて、此今までをしみたる春の来りたる方になるべき事かなとなり、春の来りたる方とは、秋冬などの事にはあれども、それを道路などの如くに言ひなしたるなり、今春の尾を過離れなば、明日よりは又来ん春の首の方に行向ふならむといふやうの意なり、（中略）又、此歌の意、今日までは我が暮しゆく前にありて惜しみし春の、明日よりは我身の後にならんといふやうにも聞ゆれども、なほ然にはあらず」と説明している。複雑に考えたとわけがわからなくなりそうな歌だが、一応、前記のように解しておく。

## やよひのつごもり

## つらゆき

143 ゆくさきになりもやするとたのみしを春の限はけふにぞ有ける

## 三月の晦日

こうして過ぎてゆくその先において、いつかは「春」になるだろうとあてにしていたのに、気づいてみれば、春の終りの日はもう今日なのだなあ。

『貫之集』になし。

「ゆくさき」は一四二に既述。「春の限り」は一四一に既述。「ゆくさき」と「けふ」とが対語の関係になる。例、『一条摂政御集』一〇六「ゆくさきを思ふ心のゆゆしさにけふを限りと言ふにざりける」

表面的には、いつかは春になるだろうと頼みにしていたのに、春になったという気もしないうちに、早くも今日は春の終りの日になったと、春の過ぎることの速やかなるを嘆いているが、『新抄』は裏の意として「身の昇進する事を成出ともなるとのみ云、その詞にきかせて、此春などは出身<sup>なりゆき</sup>の事もやと頼みしものを、其時節の春はけふ限にてある事よとなげく意をかけたるなるべし、二三の句のさまざま必ずふくめたる趣意あるべく思はる、三月「一月とすべきか」は司召ある月なればなり」と解している。妥当な解釈である。↓一三五。

## よみ人しらず

144 花しあらば何かははるのおしからんくるともけふはなげかざらまし

花さえあるならば、どうして春の終るのが惜しいことがあろう。もしそうであれば、春が暮れても、今日は嘆かないであろうものを。

『躬恒集』II 四二(III 三八七)の「花しあらば何かは春のをしからん暮れめ(III「ぬ」とこそはけふをみましか」に似ている。

類想歌、『新撰万葉集』二六七「散る花の待ててふことを聞かませば春

はゆくとも惜しまざらまし」『朝忠集』四三「花だにも散りて別るる春ならば今日をわりなく惜しまざらまし」『曾丹集』五七〇「花の香の枝にしとまるものならば暮るる春をも惜しまざらまし」

『躬恒集』III 二九四「桜花散りくる水の絶えざらば花は散るともなげかざらまし」『重家集』五八三「明日までも散らでみるべき花ならば暮れゆく日をもなげかざらまし」

## みつね

145 くれて又あすとだになきはるの日を花の影にてけふはくらさむ

日が暮れては、また再び明日という日さえも無いこの春の最後の一日だから、花の蔭で今日は日が暮れるまで過ごそう。

『躬恒集』II 一八七詞書「やよひのつごもり」歌おなじ。『躬恒集』I 一三二「今日暮れてあすとだになき春なればたたく惜しき花の蔭なり」とよく似ている。『古今集』春下「今日のみと春を思はぬときだにも立つことやすき花の蔭かは」も躬恒の作であり、この形は躬恒としても気に入っていたのであろう。

下句、『古今集』春下・素性「いざ今日は春の山辺にまじりなむ暮れなば無げの花の蔭かは」『続古今集』旅素性「雨降らばもみぢの蔭に宿りつつ立田の山に今日は暮らさん」(素性集、第五句「やどりはてなん」)などの影響あるか。

『和泉式部統集』五三四(四月一日よめる)「きのふをば花の蔭にて暮らしてき今日こそいにし春は惜しけれ」『新後拾遺集』秋下・後深草院弁内侍「なごりをば夕べの雲に留めおきて明日とだになき秋の別路」

やよひのつごもりの日、ひさしうまうでこぬよいひて  
侍ふみのおくにつけ侍ける づらゆき

146 又もこむ時ぞとおもへどたのまれぬわが身にしあればおしき春哉

づらゆきかくておなじ年になん身まかりにける

三月晦日の日、ながらくお伺いしなかったということを申しました手紙の奥に書き付けましたうた

再び来るであろう春だとは思うけれど、来年の春まで生きているかどうか当てにできない我身であるから、過ぎ行くのは惜しい春であることよ。

貫之は、こうして同じ年のうちに亡くなったのであった。

『貫之集』Ⅰ八七七詞書「三月つごもりの日、人にやる、かねすけのみたらかなり」とあり、Ⅱ二七では「藤原のまさただといふぬしのもとに、春のくるる日たてまつる」とある。歌はおなじ。『和漢朗詠集』三月尽、第五句「をしくもあるかな」、『躬恒集』にも収められているが誤入であろう。

『新抄』は前記現代語訳のごとき説明をしたあとに、「猶思ふに、初二句に、春ならでも又も来給ふべき君ぞとは思へどもといふ意をふくめたるにもあるべし」というが、詞書の「まうでこぬ」は到達点（手紙を受け取る側）に視点を置いた言い方であり、相手が来ないの意ではなくて、貫之が行かないの意であるから、この解釈は誤り。

春は再び廻り来るが、我身はそうではないという発想、例の「年々歳々花相似 歳々年々人不同」などを意識したものであろうが、日本漢詩でも『田氏家集』「花前有感」に「年々花発年々惜 花是如新人不新」『新撰朗詠集』三月尽「花鳥縦雖期向後 流年豈返老来身」など、平安時代

にはごく常識的発想になっていた。『続古今集』雑上・家隆「老いが世の我が身の花のなごりまで今年はいたく惜しき春かな」など、貫之の歌と類似の発想の和歌も多い。

詠歌事情について、『貫之集』歌を送った相手を「兼輔のみたらか」とも「藤原の雅正といふぬし」ともする。「みたらか」は不明の語で、『標注』は「みたち」（御館）として引用する。兼輔の歿年は承平三年で、貫之の歿年より十一年早いから、左注を信じれば、兼輔ではありえない。雅正は兼輔の息男だが、「藤原のまさただといふぬし」という書き方も、他は「まさただのあそん」とあり不審である。また、本集は貫之を兼輔・雅正父子と組合せて収載する傾向があるのに、『貫之集』の伝えが事実なら、ここに雅正の名を出さないのも不審である。相手が誰かは、なおはっきりしないというべきであろう。

貫之歿時のこととしては、源公忠に歌を詠み送って、返事のある前に死んだということが、『貫之集』『拾遺集』哀傷に見える。

この巻の末尾の辺り、貫之を軸とし、その愁いをたどる趣きがある。

（巻三終り）